
COMPLEX VARIETY!

Tm

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

COMPLEX VARIETY!

【ΖΖード】

ΖΖ3620

【作者名】

Tm

【あらすじ】

能力的に平凡な捻くれ者の義姉と文武両道容姿端麗チートな義弟のやりとり他それを取り巻く人々のあれこれを綴つた、番外編寄せ集め。

閲覧は本編『COMPLEX TRIP!』最新話まで読後推奨。読んでなくても気合で読める。お暇つぶしにご覧ください。時系列はバラバラです。

OTHERS- (前書き)

時系列：楓 高校一年生。新高校一年生。入学して三月経つたか経たないか、くらい。

「お前さ、何様なの?」

なにさま。出来れば王様ゲームの王様になつてみたい。なーんて言つたら、ぶつ飛ばされるんだろうな。そんな剣幕で、彼は言った。

「あいつ、お前のことすっげー慕つてんじゃん。見てても解るよ。なのになんなの、あんた。いやに新に冷たくね? なんか恨みでもあんの? あいつの姉貴なんだろ?」

て言うかその前にアンタ誰ですかまず自己紹介してから文句垂れてくれませんかね。

放課後に呼び出されたと思えばこれですよ。流石に告白とまでは勘違いしないけどね、まさか新さんのことで男に文句言われる日が来るとはあーた、夢にも思いませんことよ。恐るべし新さんフローモン。

校舎の壁に寄りかかりつつそんな事をちくちく考えていると、顔の横にばん! と平手を突かれる。わお、お約束ウ。どうでもいいけど君、体格いいね。バスケ部かなにかかしら。見上げているとやや、首が疲れる。

「聞いてんのかよオネーサン」

「聞いてますがその前にこちらもお聞きしてもよろしいでどうか」
慇懃無礼に言い返すと、敬語が耳慣れないのか怪訝そうな顔を浮かべた。すかさず畳み掛けてみる。

「私、二年七組の出席番号は六番、一條楓と申します。対するあなたについてお尋ねしますけど、学年とクラス、お名前を伺つてもよろしいでしょうか。あ、出席番号、好みのタイプにつきましては、黙秘可能ですかね?」

「いや、つーか好みのタイプって」

「うん別に興味はないんですけどね。せめてホモかヘテロかだけで

も確認できればなーって

なにを言つてんだこいつ、てな顔をされる。そんなこと言つたつてねえ？ その辺確認しなきゃ私の対応というものもまたベクトルが違つてくるといつもの。ライクかラブか。その辺りの見極めは重要だと、お姉さんは思うのですが。じつと待つていると、少し戸惑つたように目を泳がせる。

「いや、てかなんでこの状況であんたに自己紹介しなきゃなんねーの」

「身元を晒せないけど私には文句を言いたいと。匿名」

「ハア？」

「いいんですよ。私は何も知らなくとも。ただ貴方が私に直談判するに当たり自身はなんの情報も開示せずに自己主張したと、ただそれだけの情報が私の中にインプットされるだけですでの」

ひく、と彼の表情が引きつる。存外正直なタイプのようだ。人を呼び出すにしてもこんな人気のないところで一人きり。誤解してくれと言つていいようなものだけれど、その辺りこの体勢も含めて自覚はあるんだろうか。なさそうだな。脳筋っぽいし。

と、つらつらどうでもいい考察をし始めたところで私の視線に耐えかねた彼は身を起こして不機嫌そうに顔を背けた。

「一年一組出席番号は十七番、相模明さがみあきらだつ」

これでいいか文句あつか好きなタイプなんていわねーぞつ。と言わんばかりの顔で彼は答えてくれた。新さん、随分といじりがいのあるお知り合いがいることで。いやはや、若干羨ましいぞお姉さんは。

じーっと危ない目つきで見ているのがばれたのか、その相模君とやらは毛を逆立てるように警戒して一步後ずさつた。

「なんだよ！」

「いや、その言葉そつくりそのまま進呈します。私に言いたいことがあるんでしょう？ 自己紹介も済んだことですし、どうぞ？」

「のままつやむやにしていじり倒して追い払つてもいいが、いか

んせんこれから夕方の再放送がある。早く帰りたいので巻きでこきます。ちやちやっと聞いてさつと帰ろつ。

「……いや、あの、あ～……つと」

「オイ。いい加減にしろよ。出鼻くじかれたから言いたいことすつ飛んだとか言うんじやないだろつなふざけんじやねーぞこちどら時間との勝負なんだよテメーのちやちな正義感に付き合つて見逃したらどうしてくれんだこのスットコドッコイ。

頭の中で罵詈雑言、表面上はにっこり仏の笑みで対応するお姉さんです。出来た姉を持つて幸せね、新さん。

「解りました。では纏まりましたらその『』連絡ください。週休二日土日休みで午前七時より午後十一時まで受け付けておりますので、その間にご連絡くださいますよ、お願いしますね。これ、専用アドレスです。ではごきげんよ」

「あっ、おい」

颯爽と去る、姉。その後姿は見るものたるや畠然とせむほど、清清しい去り様だったといつ。

……だといいなとか考えながら、家路に着いたある日の出来事。

後日、彼から連絡が来たかといつと、それでもなかつた。ただ新さんがひどく陰鬱としたオーラで『相模』という男を知つていて『』と聞いてきたので、知らないと答えた。彼の日の出来事で私の記憶に残つているのは再放送のドラマの悪人だつた主人公がいい人になつた途端腹を刺されてぶつ倒れーなエンドだつたということだけ。

あ、アドレス？ ダミーですダミー。いちいち答えてたら身が持ちませんつてえ。アハハ。

OTHERS-（後書き）

作者の筆力不足による必死な補足説明：

新さんのお友達の相模君が、姉より冷遇を受ける彼に同情し鬼畜姉に直談判に向かったところ見事返り討ちにあり、後々我に返つて律儀にアドレスに連絡してみたものの繫がらず痺れを切らして新さんに詰め寄つたらあらまあ本末転倒、事が発覚して新さんにより懇々とお説教をくらい釘を刺されましたというオチ。

ついでにその後相模君が姉のキャラに興味を持ちかけたので新さんはフラグが立つたと早とちりして大真面目に相模君を脅しました。

OTHERS—?—（前書き）

時系列：楓 高校二年生、相模君高校一年生、季節は初秋

「 よお 」

木枯らしが吹ぐ。一步、また一步と乾いた砂利を踏みしめ向かう先には、彼がいた。気だるそうに壁に寄りかかり、足を組み、けれどこちらをしっかりと見据え力強い眼差しを容赦なく突きつける。待つていたと、言わんばかりに。

みたいな昭和のカヲリ漂うロケーションで佇む彼に一体どんな言葉をかけてやればいいのだろう。私は彼の期待に応えられるだろうか。息を呑み、慎重に声をかけた。

「 そこは、こひ……意味もなく偉そうに威厳を無駄に醸しつつ、口にはじつかで龜り取つてきた草を口にこぼくつとしているのがセオリ一かと 」

「 誰が番長だ。銜えるかんなもん 」

「 やだ。銜えるなんて、卑猥な。何を銜えるつもりなんですか。セクハラは止めてください 」

「 は?……なつ、バツツ、アンタのがセクハラだろ! 」

期待通り顔を真っ赤にして取り乱す少年、もとい相模明君。聞くところによると、新さんのご友人らしい。クラスの男子から言伝にその名前を出されたとき本気で誰か見当がつかなかつたけれど、呼び出された校舎裏でその姿を目にした瞬間に漸く思い出した。

ああ、あの、相模君。弄り甲斐のあるあの相模君ね。

なるほど。久しぶりの好感触に記憶が蘇る。そういうえばあの時は話を聞いてあげられなかつた。そのせいか今回は放課後じやなくて昼休みに呼び出し。学習能力はあるくせに弄り対処の応用力はないらしい。ますますもつて将来有望。

「 それで、何か御用ですか? また新さん関係でしょうか 」

「 いや、新は、別に 」

なにやら口の中でもじこじこと言つてゐるため言葉が尻すぼみにな

つてよく聞こえない。そんな彼に近付き、顔を覗き込んだ。随分と背の高い子だ。そして隙が多い。

「銜えたいとかいわないでくださいね。そういうのは直接本人に交渉していただきないと」

「なつ、んの話だつ。やめなつ、おつ、女がそういうことを軽々しく言つな！」

「そういうことつてどうこいつですか？ ビツコツの意味ですか？ 詳しく教えてくれませんか」

「クツツツ」

だあーもー、くそー。とか咳いて後退りして、しゃがみこんでしまつた。頭を抱えているから顔は見えないけれど、耳が真つ赤だ。初っ端から飛ばしそぎてしまつたかもしけない。

いけないいけない。こういうことはじつくり行かなければ。

「あの、すいません。悪ふざけが過ぎましたね。それで、御用は？」中腰で問いかけると、ガシガシ頭をかいていた彼の手がぴたりと止まる。それからそろりと顔を上げ上田遣いで恨みがましそうに見上げてくるものだから、嗜虐心がいつそそられたのは言つまでもない。なんのだらつ。新さん含め、やつぱりこいつことは似たもの同士が集まるつてことなんだろうか。愉快な仲間達だこと。思わず浮かんだ暗黒な笑みをモロに見てしまつたらしい相模君は顔を引きつらせた。

「……アンタ、絶対ヘンだよ」

「然様ですか。それが言いたくて私をここに？」

「いやつ、ちがくて！ そうじやないんだ」

大慌てで言いながら、がばつと立ち上がる。直情的な子だ。

「あの、俺、謝りたくて。アンタに、いや、一條先輩、に

「アンタでいいです。先輩後輩で馴れ合つよつた仲でもありますん

し

ていうか一條先輩つて呼ばないで。虫唾が走るわ。言わないけど。

「あ、まあ、ハイ、いや……うん

何が後ろめたいのかでかいナリしてしどろもどろしながら田を泳がせる相良君。別に時間が押してるわけじゃないんだけど、早くしてくんないかな。じゃないとまた弄りたくなつてくるんですね。なんなんだろう、このイラッとするような、和むような、矛盾した気持ち。人はこれをジレンマと呼ぶのだろうか。

「俺、謝りたくて。この間はあの、アンタのこと良く知りもせずに色々勝手なこと言っちゃつて、本当に」「ちょっと待つてください」

びしつと平手を出してストップをかける。のけぞつて口をつぐんだ相模君が続けられないよう、すかさず追い討ちをかけておく。

「貴方が私のことをどの程度知ろうと知るまいと先日かけられた言葉に私が不快感を覚えていれば理由の如何に問わず謝罪を受け入れるつもりはない、ということは置いておきましても」

「あ、え？」

「謝りたい、つて。どうして。貴方は貴方なりの主張があつて私を呼び出したのでしょうか？ それに応えなかつた私に文句があらうと謝罪する謂れはないと思うんですけど」

矢継ぎ早にほんほん言つているせいか頭がついていかいらしく、相模君の頭の上にはてなマークが量産されて見える。それでも辛抱強く待つていると、やがて相模君はなにやら氣まずそうに「もじ」もじ咳き始める。

「いや、俺もあいつに色々言われて思つところもあつたつーか」

「あいつ。色々言われて。新さんにですよね。何を？」

「何をつて、そんなこと」

「これだけ見つめてちつとも目線が合わない。私は猛犬かつーの逃がさん。

「私には関係ないと。本人の目の前でこれ見よがしに匂わせておいて随分ですね。相模君は焦らしプレイをご所望でしょうか。けつたいなご趣味をお持ちで。いや、意外です」

「なつ、ちが！ 違う！ なんでそなるんだ、俺はただアンタに」

「私に、なんでしょう。なんと言っていたんでしようねえ、新さんは。あらかた『姉さんは悪くない』とでも言つていたんでしようねえ。アラ、図星。いやはや、全く私は優しい弟を持つて幸せです」しまつた、と思ったときには相模君の眼差しが怪訝なものに変わる。今度は私の方から田を逸らし、ビーム吹く風とばかりにそ知らぬふりをした。

「謝罪は結構です。受け付けません。棄却します」

「は？ ちょっと待てよ」

「私は貴方に謝罪が必要なほどのことされた覚えがありません。よつて勝手に謝られても困ります。お解りですか。お解りですね。ではハイ、これにて一件落着。さようなら」

人によつては不快感を煽るような言い方をした。なのにまだ納得していないのか、踵を返した私の肩を掴んで引きとめようとしてくる。全く煩わしい。こいつもお人よしだのなんだのと言われる類の人種だ。振り返り、納得していないような彼を仰ぎ見ながらさりげなくその手を外す。

「いい友人を持つて新さんが羨ましいです。今度ウチに遊びに来てください。交渉の際にははりきつて援護させてもらいますよ」

につこり微笑むと、呆気にとられたように彼の目が丸くなる。そのきょとんとした様が誰かを思わせて、私は少し笑つてしまいながらも今度こそその場から立ち去ることに成功した。

我に返つた相模君が後ろから『どういう意味だ』と叫ぶ声が、妙に心地よかつた。

『姉さんは悪くない』だつて。

「悪いに決まつてんじやん、バカ」

降り積もる悪意は、木枯らしにも搖るがない。彼にこの心は、ま

だ届
か
な
い。

OTHERS—～？～（前書き）

時系列：楓 高校二年生、相模君高校一年生、季節は秋下旬。ネタ
バレにつき本編最新話まで読後推奨。

田を離した隙に闇は訪れる。冬はいつもそう。気がついたときにはもう窓の外は真っ暗でした、なんてよくある話だ。

パブロフの犬のように、暗くなつたら帰り支度を始める彼らを尻目にいつものコンビニへと向かい常田さんを待つ、なんてのが私の法則。けれど日々、そう、ほんの時々無意味にそれに抗いたくなつて、気まぐれで同級生に紛れて電車で帰つたりする。勿論常田さんにはメールを入れておく。

気まぐれの癖にいちいち連絡を入れる、なんて億劫ではあるけれど不自然な行動は私には許されていない。義務はいつでも携帯しておぐ。それが私に課せられた日常。

そうして適当に時間を潰し、適当な電車に乗つて、いつもより遅く帰宅する。所詮私に許された気まぐれなんてそんなもの。不満があるわけじゃない。ただ、そうだ、單なる子供じみた反発心だ。

ただそれだけの為にちょっと遅く帰宅する。少しでも遅く、けれど違和感の無い程度に時間を潰して帰宅する。馬鹿みたいだと自分でも思う。くだらない。茶番だ。それでもこれでほんの僅かなずれを微修正している。

こう見えて必死なのだ。こんな些細なことに。

その日は学校近くの駅の周辺で時間を潰していた。そういう時は本屋や雑貨で物色したりその辺のコーヒーショップでコーヒーを飲んだり、そんな風にして時間を潰すけど、その時はというともうあらかた済ませてさほど時間も余つていなかつたから最後にコンビニへ向かっていた。何をするわけでもなく適当にふらついて、ちょっと立ち読みして、肉まんでも買って帰る。大抵そんなものだ。

そうしてふらつと目的のコンビニに辿り着き、そして興味も無い雑誌のどれに手を掛けようか視線を巡らせていくとき、それは聞こえた。

「あ、中華まんいいですか。えーと、あんまん一つと、肉まん一つとピザまん一つ、カレーまん一つ、チョコまんひとつ、あと子猫まん一つ」

九つ。割と多いせいか店員が取り分けながら聞き返したりしている。どんだけ大家族なのか、それとも使い勝手のいいパシリか中華まん好きの大喰らいか。

声はどうやら若い男性のようだつた。あれだけ頼めば備蓄していた中華まんはごつそり減つて寂しい中身を晒していることだらう。そんな豪快な買い方をする人間にちらりと興味が湧き、雑誌に伸ばした手を引っ込め商品棚の列から悦子の如く覗いてしまつた。

さて、中華まんを九つも購入する猛者は一体どんな奴なのか。

ほう、なるほどねえ。

「ありがとうございましたー」

間抜けた効果音が鳴り、その人物はコンビニから出て行つた。どうやら私の存在に気がついていないらしく、そんな素振りは無い。そのままさつと手に取つた雑誌を盾にしてその彼の後姿を見送つていたわけ、なんだけどね。そこで振り返つちゃうのがまあ、らしいつちゃあらしいかもしれない。

「げつ」

つて聞こえたね。

いや、正確にはある程度の距離と分厚い硝子を挟んでいたわけで、聴覚的にはアウトオブ圏内だつたわけだけど、まあそこはホラ、解りやすいから。いいアクションについてはもう、先日とつくりと確認済み。

挨拶代わりにこりと微笑み返し、私は当所の予定を変更し雑誌を返してから何も購入せずにコンビニから出た。実も蓋もない

「ありがとうございました」に見送られ、私は存外軽快な足取りで、雪像の如く固まる彼に近付いた。

「こんばんは」

「うう」

ううて。随分と嫌われたものだ。宵闇でも解るほど顔が引きつっている上に、大げさすぎてわざとなんじやないかと疑うほどに仰け反つている。これは寒さのせいとかで誤魔化せるレベルじゃないな。まあ嫌われてようが苦手意識をもたれていようが避けられていようが愉快なことは変わりはない。あそこで振り返らなければ見逃してやつたものを、どうも彼はここに「う」ときに外ならない性質らしい。つぐづぐオイシイ子だ。

「随分と沢山、中華まんを買われていましたね」

「いや、あの、これは」

じういう風にどもつていると聞いてくれと言つてこるようなものなんだけど、自覚は無いのだろうか。無いんだろうな。あえて同情めいた表情で、そのうろたえる顔を覗き込んだ。

「何かお悩みでしたら相談に乗りますよ……？」

「パシリじやねーよッ……あ、う、くそッ」

しまつた、とばかりに困惑やら焦燥やら色んなものが混ざつたなんともいえない表情をする。

新さんはまた一線を画する素直さ加減だ。ジャブは上々。これだから見るとイジリたくな。

「まあそうでしょうね。立ち話もなんですから歩きませんか。それとも他に行くところでも？」

「まあそうでしょうね。立ち話もなんですから歩きませんか。それとも他に行くところでも？」

「いやつきそうな類をどうにか抑えて先手を取つた。彼はなんだかも「こも」言つていたけれど、私が先に歩き出したので渋々とばかりについてきた。

ここは新さんと違つて押しに弱いんだよなー。あの子の場合寧ろされるより「こも」押しするタイプだから。類は友を呼ぶと言つても、早々全く同じところわけでもないらしい。そうでなきや面白くない

けどや。

「寒いですねえ」

「あっ、ああ」

白い息が頬を掠める。ぎこちなく隣を歩く彼は、通学用の鞄とさき買つた肉まんの袋を携え、肩には馬鹿でかいスポーツバッグをぶら下げている。いつも思うけれど、一体何が入っているのか。運動部で無い私にはその鞄の中身にはいつも未知を感じる。

「相模君は、何部なんですかね」

今はテスト期間だから帰りがかり合つたのだろう。普段ならば私が帰宅途中にこういうスポーツバッグを掲げた人とすれ違うことは殆ど無い。

「あー……俺は、アレだよ。サッカー部」

「もしかしてスポーツ推薦ですか」

「……まあ」

なにやら照れがあるのか首の後ろを搔きながらぶつきあはうに答えてくれる。

しかしどう見ても体育会系だと思つてはいたけれど、推薦入学かとなるともしかしたらこう見えてレギュラーも獲得しているかもしれない。流石新さんの友人、並なうで並じやなかつた。

まあ私も推薦だけど、普通推薦だ。けれどうちの学校のスポーツ推薦と言つたら割と有名なようで、卒業者は大手大学入学者やスポーツ界で活躍するアスリートをちらほらと出したりしている、その筋では中々に名の知れた学校だつたりする。そちらに特化した特別クラスまであるほどだから、中々の力の入れようだ。それ以外は手を抜いてんじやないかつてくらい何の変哲もないけど。

実を言うと新さんも陸上競技の枠で推薦されるかという話も上がつたけれど、本人がそれを辞退して普通に受験して普通に首席を取つたりしていた。けつ。

まあ新さんはともかく相模君はこの様子だとスポーツ推薦らしい。けれどそうなると特別クラスに配属されるもののはずなんだけど

。私が考えていることがわかつたのか、相模君はつづくと苦笑した。

「推薦は、まあ、色々と優遇されるから。でも俺そつちに進む気はないし、普通科希望したんだ」

「へえ……」

色々と、ね。確かにその辺りは色々免除されるらしい。どれがどの程度かはあまり詳しくは無いけれど。

「なるほど、それで相模君は食いしん坊なんですね」

「ちげーっつの。食うにしてもどんだけ中華まんにこだわってんだよ。これは、あーっと、ウチの奴らについてに買ったつづーか」

それは一人二つずつ以上食べる計算なんだろうか。どの道基準からやや逸脱している気がする。もしくは九人家族。ワオ、相模さんちの特集組めそう。

夢を広げていると疑わしげに相模君が覗き込んでくる。

「アンタ絶対なんか勘違いしてるだろ」

「いえ別に。ちなみに相模君のお宅では一日何回洗濯機を回すのですか？」

「やっぱ勘違いしてんじゃねーかつ。これは俺と親父と母さんとじーちゃん、あと姉貴と弟と妹のぶんだ」

ムキになっちゃってマア。まんまと個人情報掠め取られたとかいう自覚も無いんだろう。家族構成ゲットだぜ。

しめしめ脳内プロフィールに書き込みつつ、それでも腑に落ちなくて、ん？ と首をかしげた。

「二つ余りませんか？」

「あー……んー弟は双子なんだ。でー、あーあと一個はー……うん」

なんと弟君は双子。大家族とはいかなまでもなかなかの構成人数。感心している私を尻目に相模君はなにやら一人で納得したように袋をがさごそ弄り、見慣れた紙包みのそれを二つ取り出して、歩きながら私の前にそのうちの一つを差し出してきた。

「ん。アンタ肉まん食える？」

「はい、まあ。あの……」

「じゃ俺はカレーにしとこ」

何か言つ前に、はぐつと大口でそれを食べ始めた。

受け取つた手前今更何か言つのも無粹か。少し躊躇したけれど、ありがたく私も」馳走になることにした。

「イタダキマス」

「うん。んで、それでチャラな」

私が一口目をかじつた瞬間、もう最後の一口をべらりと平らげた相模君がなんてこともなさそうに言つた。何を言われたのか即座に意味を図つた私は偉いと思う。

「ほのひふようは、ん。ないと、以前にも言つたはずですが」不覚にも不意を突かれたせいいかちよつと喉に詰まる。飲み物が欲しいと思いつつそれでもなんとか嚥下すると、相模君ははーっと大きく白い靄を頭上に吐き出した。

「いんだよ。アレで終わりじゃ俺の気が済まなかつたの。アンタは大人しくそれを食つてくれりやー いい」

「律儀ですねえ」

「ちげーよ。俺が迂闊だつた。そんぐらい、解つてる」

何を言つかと思えば。自責の念でも抱いているというのだろうか。たつたあれだけの、あの程度のことで。

思わず振り返ると、彼は数歩後ろに立つていた。私が振り向くと同時に、潔い速さで頭を下げる。

「悪かつた。もうつまんねーことでアンタを煩わせたりしない。約束する」

イヤどつちかというと大いに煩わせたのは私の方だと思うんですけどね。散々私がおちょくつたことを差し引いてみればお釣りが来るほどだというのに、彼という人はそれに思い至るという発想すらないらしい。

どうして、こういった人種はこうも真つ直ぐなんだろうか。真つ直ぐではないと死ぬ病にでも罹つているのか。我を通さねば我慢な

らない何かを持っているとでも言つのか。普通に考えてこんなこと、道端に落ちた小石を足で跳ね除ける程度のことだ。それをいちいち拾つて丁度いい場所に置くとか、普通に考えてありえない。

ありえないが、厳密に言えば彼がしていることもその類のことだ。馬鹿正直すぎてこっちが白けてくる。どうぞ付け入つてください、と自分から宣言しているようなものだというのに、こいつらの人は間は酷く真面目な面持ちでこれをやり通そうとする。

きっと知らないのだろう。そういう人間がいるように、そういう人間を見て苛立つような人間がいるということを。

口元が歪んでいるのがわかる。傍目から見て解るほど、私は今皮肉めいた笑みを浮かべていることだろう。

「やめてくださいよ。頭を下げる義理なんてありません。それともなんですか、また新さんに何か言わされましたか」

「新は関係ない」

言つてくれる。その矛盾を吊り下げて私にどうしろと？ してもいいの？ 弄つてもいいの？ 心行くまで、あなたを。

「無防備すぎる。新さんも、あなたも。」

「そうですかねえ。そこまで頭を下げなきやならない理由なんてないでしょに。何を言わされました？ 事情があるんだーとか？」

「いかにも言いそうだ。当然のように私をかばう。それが逆効果だと、知つているのかいないのか。どんどん嗜虐的になつていく思考に歯止めをかけそこない、あけすけな冷笑を相模君にまで向けてしまう。彼は関係ないのに。」

それでも。

それでも相模君は、搖ぎ無くキツパリと首を横に振つた。

「事情なんざ探せばそこら辺に転がつてゐる。誰にでもあるもんなんだ。そんなのは当たり前だ。……だから、だからこそ、『ごめん』

誰に、でも、か。

これ以上言えば、私が悪者かな。執拗に頭を下げ続ける彼のつむじを見つめ、息をついた。

寒さのせいだろ？　どうにも、肩に力が入つてしまつていったようだ。

「わかりました」

言ひや否や、彼は勢い良く頭を上げ、スッキリしたようにまた大きな息を吐いた。

「あーっ、やつと言えた。アンタなかなか言わせてくれないから、マジ参った」

「……それは、どうも」

私だつて貴方がそれほど気にしているとは思わなかつた。私自身、気にしているいない以前に忘れていたくらいだし。

というか日常茶飯事過ぎてあんなことにいちいち気を揉んでたら今頃登校拒否を謳歌しているところだ。この子は私を舐めてるんだろうか。そう言つたらどう返すだろ？

悪い虫がうずきだすのを感じつつ、これ以上は駄目だーと自制をかけて歩みを再開させた。

「子猫まんは妹さんにですか」

「あ？　　ああ、うん。好きそうだなって」

はにかんで答える彼の目元が、柔らかく緩んでいる。これがお兄ちゃんの顔つて奴なんだろうか。妹さんが可愛いんだろうな。それでも家族全員ぶんキッチリ買つちゃうところがまた律儀。

きつと一つ多かつたのは、年頃の高校生に中華まん一つじゃ足りないからなんだろう。なんなくそれを私に分け与えたことこそ、彼の人間性そのものを示しているような気がした。

本当に、新さんはいい友人を持ったようだ。

「何笑つてんだよ」

「笑つてました？」

「笑つてただろ」

笑つてた。

「どうした」

「どうか、まだ、私は。

「……いえ。ああ、大分来すぎましたね、スマセン」

気がつけば、駅のすぐ近くまで辿り着いていたらしい。謝ると怪訝な目を返されたので、お答え通りにやりと微笑み返してあげた。

「お家、すぐ近くでしょ。通り過ぎてしまつたみたいで、どうもすみません」

「なんでアンタが俺んち知つてんだ！」

うわ、吃驚通り越してビビッていらつしゃる。いや知らないけど、通り道の途中で一本道を歩いていたのに視線がちらちら曲がり角に向いてたから、そうじやないかなーと当たりをつけただけでありますよ。けどこれで言質は取れた。相模君ちは駅の近く。個人情報ましてもゲット。

「すいませんねえ、こんなところまで。むひーの辺で結構ですよ」

「いや、どうせだから最後まで……」

「最後まで？ 困ります。私たち学生ですよ。ましてや出会つたばかりですし、そういうことはちゃんと段階を踏んで……」

「な、ん、の、は、な、し、だつ」

くいつきこいなあ。これだから病み付きになつちやうのよねー。

ある意味たちが悪いと思うの、この人。

噛み合わない会話にもどかしいのかガシガシ頭を搔きながら、相模君はげんなりしたように呟いた。

「アンタさあ、いい加減にしたほうがいいよホント。俺だからまだいいけど、男に向かつて軽々しくそういうことをさあ」

「だからですよ。相模君になら安心して言えるんです」

「なつ、どつ、どつという意味だッ」

「声が大きい。駅も近いため道行く人がちらほら見てくるけど、相模君は気付かない。私もどうでもいい。だつて実害は無いし。

なにやら真つ赤になつて何かを連想している相模君に、満面の笑みを浴びせて宣言してやつた。

「だつて女に興味ありませんしね。安心安全です」

「バツ……止せ！ 道のど真ん中で変なことをツ。おい、あのな、

』の際だから言つとくけど俺は女の方が好きなんだ！」

私は『女に興味が無い』と言つただけだしそもそも道のど真ん中で『女の方が好きなんだ！』と宣言する貴方は馬鹿じゃないんですね。

とは思えどこの流れを止めるのは惜しい。続行。

「女の方が好きだけど男もイケる口と。なるほど、流石相模君、両刀使いとは格が違いますね。おみそれしました」

「ちつが……あーもー！ 勘弁してくれよ～ツ」

ああ楽しい。愉快でたまらない。打てば響くとはまさにこのこと。いい声で鳴いてくれるわこの子。本当に将来有望だ。メシウソマサギて箸が止まりません。

「あーくつそ。もう解つた。もつ我慢ならん。おいオネーサン」顔を上げてキツと睨みつけるかと思うと、威圧するよつと見下ろしてきた。地雷を踏んだことには気付いていないらしく。

『オネーサン』はお姉さん、嫌いなのよ、相模君。

「あんまり男を舐めるなよ。そつこう」とばっかり言つてるとな」「す、すみません。からかいが過ぎました。私、つい……」

えつ。と田を丸くした隙に、反省の念を眼差しに込めてじつと見つめてみる。さつきまで凄んでいた彼はどこへ行つたのか単純なほどあつさりと息を詰まらせた。

「そうですね。違いますよね。相模君はそういう人ではありますよね」

「あつ、うん」

あつ、うん、だつて。きょとんと惚けた眼差しに俄かに噴き出しそづになりつつ努めて表情を引き締める。

さあて、メインディッシュ頂きます。

「私、ちゃんと解つてます。相模君は、違つて」

「あ、」

相模君の戸惑いに揺れる眼差しが、私の真摯な眼差しとかち合つ。二人の思いが交差して。

「相模君は……新さん一筋なんですね。解つてますから、私道ならぬ一人の恋を応援してます。永久に」

ぴき。

と、時が止まつた気がした。主に相模君の周辺で。ぐ、ぐ、ぐ、と相模君の表情が泣くんじゃなかろうかといつほど歪み、そして彼は思いつきり踵を返した。

「帰るッ。帰れッ。じゃあな！」

ふつ、ざまあない。

最後の表情は勲章モノだった。何たる逸材だらう相模君は、次もまた会い見えるとしがあれば弄らせてもらおう。

なーんてことを、脱兎の勢いで去つていく相模君の後姿を見送りつつ懇々と考えてしまつた。

吹きつける寒風の合間に縫い、一軒のコンビニへと逃れるよつこ滑り込む。

迷い無く子猫まんを買ったのは、些細な気まぐれ。こんなもので何かがキャラにならうなんて信じることはできない。

解つている。

解つちゃいるけれど、それでも何故だか 買わずにほ、いられなかつた。

OTHERS—～？～（後書き）

これにていつたん相模君終了。この数日後辺りに、トリップします。

S O F A !

～？～（前書き）

時系列：楓 中学三年生。新 中学一年生。本編最新話まで読後
推奨。

曇天が、降るぞ降るぞと急き立てる。心なし早足で家に駆け込み着替えを済ます頃には、予測通り小さな雨が点々と窓を打ちつけ始めた。

雨は嫌いじゃない。土砂降りや嵐は好きではないけれど、しどしど窓を濡らす静かな雨は、うちに居る分には疎ましくも感じない。部屋着に身を包みリビングへと下りてきた楓は、その静まり返った空間に、今この家には自身しかいないのだと悟る。一条さんは言わずもがな、新はきっとまだ学校で、お母さんは大方夕ご飯の買出しにでも出かけているかも知れない。ということは、今は楓しかいない、ということだ。つまり、そういうこと。

広いリビングを一望し満足げな笑みを口元に湛えた彼女はそのままダイニングへと向かうと、逸る気持ちで温かい飲み物の準備へと取り掛かったのだった。

以前の家では、ありえなかつたもの。そして密かに楓の憧れであつたもの。それはただでさえ広くないそのスペースの半分を取つてしまいかねないからと購入できず、友人の家か家具屋か学校の応接室でしか望めなかつたもの。それ、が今ここに、ある。

両手に抱えるココアの入つたコップをそつと手前のテーブルに置くと、楓はここぞというポイントに移り、少し勢いをつけてそこに腰を落ち着けた。弾力があり、けれど沈みすぎず硬くもなく、程よい柔らかさで全身を支えてくれるソレ。

ソファ。ザ・ソファ。イツ・ア・ソファ。

成金の重役よろしくソファの背に両手を広げ、その真ん中に陣取つた楓は、満ち足りたため息をぬふーっと吐いた。次いで足を組み、

ちょっと身体を伸ばしてカップを取りまた背を預け、誰もいないのにどや顔で気取りながらココアを啜る。上品ぶつて逆に下品なことこの上ないが、誰も見ていないこと前提でやつていることなので存分に悦に浸つた。

ああ、ソファ。ふかふかして、ゆったりできて、程よくフ
ィットする。なんて素敵な家具なのだろう、ソファ。

いつもは一条さんの定位位置のそこは、楓の密かな憧れでもあつた。いつか思いつきりそこに身を沈めて、あんなことやこんなことがしたい。お行儀良くそのソファの一端に座りながら、夢想したものだ。それが今、叶う時！　躊躇などしていられるものか。まじまじしていたら誰かが帰つてくるかもしれない。存分にその心地に浸りきつた楓は幾分落ち着いた様子で再びカップをテーブルに戻すと、いそいそとばかりに体勢を変えた。

「うひゅふふふふふふふふ。うひゅつ、むぎゅつ、うふふふふふふふ
今しがた腰を落ち着けていたそこに寝転がり思いつきり足を伸ばすと、うつ伏せで半回転したり戻つたりを繰り返しながら奇怪な笑い声を上げた。誰かに見られたらそれこそ噴死できる。けれど誰もいないからこそ、おもいつきりできる。「じろじろ回転したり足をばたつかせたり頭をぐりぐり摺り寄せたりして、思い残す事は無いとばかりにその夢心地を堪能した。

「……なにしてんの

死刑宣告の声が聞こえた。

いや、違う。消え入りそうな、新の低い声がリビングにぽつねんと転がった。片足を上げたままの状態で、楓の身体がぴしりと凍りつく。

「なに、してたの？」

無情な声が楓を追い込む。うつ伏せたまま、楓は声を絞り出すよ

うして咳いた。

「……いつからいたの」

哀れなほど無感情なその小さな声に問われ、暫し沈黙が降りる。雨が窓を打ちつける音だけが、間を繋ぐ。そして同じく新の無感情な声は、答えた。

「楓がどうや顔でふんぞり返つて小指立てながらココアを啜るといつ

「k

「わーーーー！ うわーーーー！ わーーーー！」

彼の答えを今まで待たず突如奇声を発した楓は素早く起き上がる。新の横をすり抜け怒涛の勢いでリビングから脱出した。後には呆気にとられたように立ち去る新と、誰ぞを哀れむかのよつな音が、ぱたぱたとリビングを埋め尽くしていった。

その後、楓は夕食を断り、リビングに近寄らず、新を避け、徹底して不干涉を貫き、最終的には何故か新が楓に謝罪することで事態は収束した。

一條家でこの話を蒸し返すことは、『法度とぞれて』といふ

い。

S O F A ! ～？～ (前書き)

時系列：楓 中学三年生。新 中学一年生。S O F A !
～？～
読後推奨。

煙けふる空。薄く重たくのしかかるその色に嫌なものを覚え、早足で家へと飛び込んだ。閉じた扉の外では、ぽつりぽつりとすべこまで雨足が迫っていた。

自身の立てる足音以外何一つ気配を感じないこの家屋には、その静けさこそが彼女以外誰も居ないということを証明していた。着替えを済ませ何の気なしにリビングへの扉を開いたところで、楓は妙な既視感を覚える。

以前にも、こんなことは無かつたか。いやあつた。おぞましい記憶が蘇る。そのまだ温まりきれていない部屋の気温ゆえにか、もしくは何かを振り起こされたのか、ぶるつと背筋を震わせ、楓はやや慎重な足取りで一度は踏み入ったリビングから退いた。そしてその足で再び階段を登ると、端の部屋から扉を開け、何かを確認し始める。自分の部屋までもノックまでして確かめた。階下も同様に確認し終えると、再び確かな足取りでリビングへと向かう。その辺りになると緊張感に張り詰めていた背筋は、幾分か和らいでいた。

ソファ。

いつも振りだらうか、この感触。無言で寄り添つように横たわりながら、視線だけ巡らせてリビングを一望する。一応、顔を上げて死角である入り口を再度確認するのも忘れない。もう一度目なので流石に奇声も上げない。というか一度で十分だ。忌まわしい痴態を思い出し、羞恥に唇をかみ締め、それでも再び会い見えたその夢のような感触に、ほっと一息ついた。

雨の音が、心地いい。叩きつけるような雨は好きではないけれど、しとしと心を潤す音は聞いているだけで耳に心地いい。目

を閉じて、もつととばかりに音に集中する。

とても、静かだ。呼吸の音と、雨の音と、時折息つく自分の吐息しか聞こえない。なんて心地いいセッティングだろう。BGMなんて無くとも、これで十分安眠できる。

そんなことを思つて、早くもうとつじてきた。まずい。この状態は許しても、寝オチは許されない。起きたほうがいい。寝るなら自室で好きなだけ寝ればいい。そう、思うのに。身体は言うことを聞かず、もつととばかりに丁度いい体位にもぞもぞと動き、そして幾ばくもせず、重力に従い瞼が閉じる。

心地いい、夢の中。耳に残るのは、柔らかな雨の音ばかり。

「……楓」

帰宅して、彼女の靴があつたとき、もしゃとは思った。確認の為に彼女の部屋も伺い、暫しの逡巡のあとに結局じつたりとリビングを覗いてみれば、この様子。足音立てず近付き、起こす氣もなさそうなほど小さな声で、彼女の声を呼びかけてみる。案の定、少しの反応どころか微動だにしない。これは完全に寝入ってるな、と思い至り、新は僅かに笑みを浮かべた。

例によつて反省を生かすべく、ここは起こさないほうが得策だ。例え寝オチしたあげくに起きて家人に転寝をしたことが露見しても、心地よい眠りを妨げられた挙句再び自分にこの様を指摘されるよりはマシだと考えるに違いない。

そんな考えに至り一人納得するも、なんとなしに物寂しさは否めない。ただもうあんなことは、新だつて御免だ。あの仕打ちは割と、地味にきつかった。幸い、今回は当事者が寝オチな為に、事は穏便に済みそうだ。

ふつと安堵の息をつき、けれど彼は再び思い当たつたように、すやすやと心地良さそうに寝入る彼女に見入る。

このままだと、風邪を引いてしまうかもしれない。楓の格好は制服のままでなかつたけれど、ロングパークーにスキニーを履いているだけだ。部屋が寒いわけではないけれど、何かかけておくに越したことは無い。

思い至るとすぐさま彼は立ち上がり、音を立てずにリビングを後にした。

眠る彼女は、未だ潤つ夢の中。

「始さん」
「解つて、紅葉さん」
秘め事を語るような極めて顰められた声で、阿吽のような会話が交わされる。
さて。

嘗て無いほど真剣な眼差しで田配せしあう一人の大人の目の前。そこには、すやすや寝入る眠る子羊、のような二人がいた。一人はソファに横たわりブランケットまでかけて寝入っているが、もう一人はその傍に腰を下ろし、まるで顔を覗き込んだまま眠り込んでしまったかのように（実際その通りなのだろうが）、器用に寝入つている。

この光景を目にした大人たちは、すぐに事の経緯を察知した。会話も無く目線で会話した二人のうち片方は、既にどこから取り出したのかそれを携えている。御誂え向きに、いつもは気配に機敏な彼も、慎重すぎるほどに危機意識の強い彼女も、目を覚ます気配が無い。

好機。

この機会を逃すはずも無く、長年の経験から躊躇さえも省いた彼らはすぐさまそれを行動に移した。

「あーんもう！ 可愛い可愛いっ。なにもー、この子達食べたりやい
たい～～」

「紅葉さん、もう少しあと抑えて。起きあやつよ」

「そ、そうですね。それはもったいない。あつ、あつ、ローアング
ルも抑えてください始さん」

「勿論。ああ、いいね。一カット」と題づけたい

「ですよね～～。ああ現像が楽しみ……」

「とりあえず今は記憶にも存分に焼き付けておこうね

眠る子羊一人がその盗撮写真の存在を知るのは、まだずっと後の
こと。

S O F A ! ～？～ (後書き)

普段真夜中でも親父の気配に気付ける新さんが真実寝ていたかどうかは別として。

一条家家訓

- ・一日一度は必ずみんなでご飯を食べるようになります。
- ・挨拶を欠かさないようにします。
- ・ほうれんそうを心がけましょう。

裏家訓

- ・必要以上のいちやつときは教育上よろしくないので子供の前では禁止（精々手繕ぐ程度）。
- ・常にデジカメを常備しておくれ」と。
- ・子供達のことで何かあつたら独り占めしないで情報交換する」と。
- ・ワンショットはギリ。動画は邪道（盗撮編より抜粋）。

「この間ね、夕ご飯のあと」「

「うん」

「かえでちゃんがお風呂から上がって、アイス食べたの。ガリガリくんっていう、一本百円未満のアイス」

「ああ、あれ」

「そう、あれ。そしたら新君がそれを後ろからじーっと見つめててね、私なんだかきゅんきゅんしちやつて、翌日に買つてきあげたんです。同じアイス」

「うんうん」

「それを新君に言つたらね、もつ、その、皿を、キラキラキラッて

させぢやつて」

「うわあそれは僕も見たかつた」

「そつ。もつ、心の録画ボタン押しつぱなし。内心可愛すきて身も
だえしちやつてたんだけど、本人氣のない振りを一生懸命してるか
ら、私も堪えました。一生懸命」

「あもうなんだうなあ、あの子は。なんあんなに純粹培養な
んだ」

「ほんとに。それでね、私が用がある振りしてリビングを出て行つ
たら、いそいそと冷蔵庫に向かつちやつて」

「ああもう箱でも何本でも業務用でもいくらでも買ってやるのに」
「そんなに食べたらお腹壊しちゃいます。で、食べたみたいなんだ
けど、そのあと」

「うん（ざわ……ざわ……）」

「どうやらそれが当たり棒だつたらしくて、その棒持ちながらオロ
オロしちやつて。丁度かえでちゃんが来たものだから、もつかえで
ちゃんと当たり棒交互に見つめちやつたりして」

「我が息子ながら考えてることが丸解りすぎるね」

「それでかえでちゃんがその視線に気付くんだけど」

「うん（……ゴクリ）」

「かえでちゃんは当たり棒を持つて一心に見つめてくる新君にこう
言つたんです。『早く捨てなよ』って。それはもう、すくべクール
に」

「……クツ。可哀相だけど可愛いすぎるッ。どうしたらいいんだす
ごく切ない。切なくて気が狂いそうだ」

「ね。もう本当にどうしてああ期待以上なんでしょう」

「……一人とも可愛すぎるよ」

「同感です」

一条家裏の裏の家訓

- ・愛情の前には子供のプライバシーも尊重

そりゃ あ好き合つて いる男女なら。

と、これがまた免罪符のような問答無用のフレーズがある。妙に生々しく感じるのは年頃の潔癖さゆえか、穿ちすぎなのか、そんなこたあどうでもいい。

問題はそう、その度合いというか、程度というか、はたまた種類というかもしくはレベルと測るべきか。どう定義したものかは知れなけれど、つまり、まあ有体に言えば内容による。その内容こそ、問題提起の主題である。

つまり何が言いたいかというと

おいこらイチャついてんじやねーぞバカッフルが、と言いたいけれど果たしてこれはバカッフルと呼ぶに相応しいか否か？ だ。

「始さん、痛くないですか？」

「うん、大丈夫だよ。気持ちいい」

議題その一。膝枕で耳掃除のコンボはバカッフルか否か。
ここで太ももでも撫でさすつて「気持ちいい」「イヤンばかん」
見たいな事を締まりの無い顔で応酬していたら間違いなくバカッフルだ。遠慮なく冷めた視線を浴びせることができる。

ロケーションも大事だ。リビングのソファで膝枕。家族内公共の場でのその行いは、突然目にした子供から見てみれば些か衝撃的なものがある。

あるにはある、のにも関わらずこの有様。人がリビングに入つてきても「やだつ」とか言つて照れる素振りもなければ気にする素振りもない。ごく普通に膝枕つて膝枕れて耳掃除つて耳掃除られて、それ以上でもそれ以下でもない。

これ、バカッフル？ バカッフルなの？ ていうかどつちかとい

うと 熟年夫婦みたいな空気をそこはかとなく感じる。判断しかねる。

議題その一。お風呂上りに髪を乾かしあいとしする。

これはバカツプルだろう。バカツプルだな。しかもまたリビングだし。少しは人目というか子供のメンタル面を色々な意味で気にしろよ。

つっこむところは諸々あれど、これは間違いなくバカツプルだ。そう思つてじろりと睨みつけよつかと一瞥したその時に、二人の様子をまじまじ観察してみた。

一条さんがソファに座り、お母さんがその足の間に座つて髪を乾かしてもらつている。一条さんはにこにこに穏和な笑みで優しくお母さんの髪を梳き、お母さんは。

お母さん。何、その蕩けそうな顔は。なんか、こう、ホント蕩けそつ。飼い主さんに頸の下をくすぐられている猫というか、お腹をわしゃわしゃしてもらつているわんちゃんとか、そんな類の蕩けそつな顔をしている。

小動物だ、小動物がいるッ。飼い主に撫でられてものつそい気持ち良さそうな顔してるッ。

ば、バカツプル？ バカ、バ 飼い主とペット？ 判断不能だ。

「つてことなんだけど、どう思つ？」

行き過ぎたら忠告も辞さない覚悟だつたんだけど、行き過ぎてはいないというか、私の思つていたバカツプルとはほんの少しふクトルがずれていてどうとも言えない。曖昧なままでは言及もできないので、新さんに聞いてみた。どうにもハツキリさせたくてお風呂上りに廊下ですぐさま直撃した。

しつかし、まるで茹でたて剥きたてほやほやのゆで卵のよつ。上気した頬に張り付く濡れた髪が恥ましい。とかいちいち観察してい

る場合じゃない。

「どうして……」

そんなこと聞かれても。って顔をしてくる。だよね。しかもお風呂上りになんだよって感じだよね。というか新さんに聞いたのがそもそもの間違いだったかも。

やつぱりもういや、と撤回しようとしたとき、顎に手を当ててなにやら思案していた新さんが、思い立つたかのように顔を上げた。「なに、なんか解った?」

「うん。ちょっと、来て」

おう、行く行く。作戦会議でもするのだろうか。導かれるままに新さんの部屋へと赴き、そしてせつと差し出された。

「……ナーニコレ」

「ドライヤー」

「知ってる」

不毛な会話を交わしつつ、手渡されたそれではなく新さんをまじまじと見つめる。

私はドライヤーが欲しいんじゃなくて答えが欲しいんだけど。その話を聞いて無性に髪を乾かしてもらいたくなつたんだけど。

真剣に見つめあい、無言の応酬にて結局、新さんが勝つた。

「解つたよ……」

「うん」

私が観念すると同時に、新さんはソファに腰を下ろした。私もなんだかんだ思いつつもコンセントを繋ぎ、新さんの真後ろに立つ。いやあ、それこれとは別として、ちょっと私も気になつてたんだよね。人に髪を乾かしてもらつのってそんなに気持ちいいんだろうかとか、人の髪の毛乾かすのってそんなに楽しいんだろうか、とか。

あの一人がさぞや楽しそうだったので、ついつい好奇心が。きっと

と新さんも私の話を聞いて好奇心が湧いたのだろう。後で感想聞いてみよーっと。

主題が摩り替わったことに気付く間もなく、ドライヤーのスイッチをONにした。

結論。

人の髪を乾かすのは意外と加減が難しいかもしない。あと、あれ以来新さんは二度と私に髪を乾かせることはなかつた。

「いで」

「あ、ゴメン」

「い……ッ」

「あ、ゴメン」

「……ッ」

「あ、ゴメン」

ガツとか、ゴツとか、通常ドライヤーで髪を乾かすときには聞こえない音が、新の部屋から聞こえてくる。

ほんの僅かな扉の隙間から中を伺う一人は、微笑ましいとばかりに生温い眼差しで髪を乾かしあう子供達を見守る。勿論そのうちの一人は一人はデジカメのレンズを通してその様を見つめている。寄り添う二人がドアに侍りつくように熱心に子供を盗撮している。という、シユールを通り越して異様な光景を指摘するものはいないので、二人は安心して目の前の子供劇場を観覧続行。

「バカ可愛いなー、うちの子達は」

「始さん、よく解りましたね。一人がこうするだらうって」

「んー？ まあ、楓ちゃんがこっちを熱心にみつめていたからねー。そのあと新の方にすっ飛んで行つたし、もしかしたらつて思つてさ。そしたら案の定」

「そのお陰で今日もいい絵が撮れましたねー」

「ねー。本当に期待を裏切らない子を持つて僕は幸せだなー」

「私もですよー」

「ねー」

「ねー」

にこにこ頷きあう親バカの目線の先には、楓にドライヤーで頭を何度も小突かれる新の姿があつたそつな。

「新さん、髪乾かしてあげようか
いや、いい。頭蓋骨陥没しても困るから
んぢや！ つて私はアラレちゃんか」

APRIL FOOL! (前書き)

この作品はエイプリルフールにTmが仕掛けた『嘘』です。悪ふざけの产物なので、マジに捉えず『Tm爆散しそう』くらいの心積もりでお楽しみください。

テーマ（というか嘘）は「こんどり更新断念につき付け焼刃最終話」。本編第一章『一条姉とお別れ』本文最後尾の段落より繋げて創作しています。

【第一章の『一条姉とお別れ』、最後尾の段落より。】

そして、最後の日。見送られるのは苦手だからと、向こうに送つてくれるソロンさんだけを伴い私達は神殿を訪れた。ソロンさんは宝玉を新さんに託して、陣の上に立つように促した。新さんと私は陣の中心に立ち、ソロンさんが呪文を唱えている横で新さんが咳く。

「姉さん。いや、力」

「新さん」

新さんが何か言いかけたのを遮つた私の声と同時に、ソロンさんが「送ります」と告げた。それとともに、淡い光を放ちだす陣の内側。

私はゆっくりと新さんを見上げ、微笑んだ。きっと今まで生きてきた中で一番、心のそこからの、どびきりの笑顔で。

「さよなら新さん」

大き目の一步で後退し、陣の外側へ。その瞬間に、あの時と同じ光を放つ陣。唖然とする新さんをそこに置き去りにして、そして私は

は 異世界に一人、留まつ

もうとした瞬間、痛いほどの力で腕を引かれ、陣の中に舞い戻る私。

「ちよ つ」

なんてことをしてくれたのか。これじゃ全ての目論見がパアだ。さらつと捨て台詞を吐いたつてのに、ものの見事に視界は行く前と同じ新さんの部屋に移り変わる。

台無しだ。不意を突いたつもりが、ただのアホに成り下がつてしまつた。それもこれも新さんの度を越した反射神経と動体視力のせ

いだ。

温度計のように頬が紅潮していくのがわかる。怒りのためか、羞恥のためか。ともかく文句を言つてやらねば氣が済まないと、どうにかこうにか羞恥を押し込めて顔を上げる。

と、そこには私以上に憤怒に満ちた様相を湛える新さんが、いた。

「どういうことだ……」

本当に新さんが発したのかと疑うくらい、低く低く薄暗い声で問われる。

「へつ」

「どういうことだと聞いてるんだ！ やつぱりあの手紙は嘘じゃなかつたのか！ 嫌いか！ やつぱり嫌いって俺のことかッ」

ちょつ。

「なに、今はそんなこと、」

「そんなことじゃないツツツ」

「はひいっ」

なに、なんなの、なんだつてのこの迫力。まさかの逆ギレ？ むしろ逆上？

掴まれている腕がギリッギリ軋み力ナリ痛い。力ナリ痛いけど、怖くてうめき声すら出てこない。阿修羅象も涙目になるくらい怒つてはる、怒つてはるよこのお人。

「嫌いってなんだ、えつ？ 僕が嫌いなのか！ ビジが！ ビジいつた風に！」

「ちょ、おち、落ち着いて」

「これが落ち着いていられるか！ 僕が嫌いだと？ きりつ、嫌い？ 嫌いイイイイイ？」

「ひええええ、お助けッ」

自分で連呼して自分でボルテージ上げないでよつ。私一回しか言ってないじゃんんん。しかも手紙。更に今更。

ていうか形勢逆転どころか下克上にも程があるでしょこの展開。

誰が予想したよ」んなある意味バッジエンジン。

「嫌い……」

ふと、突然新さんの勢いが沈下したよつに制止した。ぽつりと呟いたかと思えば、私を掴んでいた腕ごと弛緩するよつにだらんと下げ、俯いた。

そんなにショックだったのかな。

罪悪感のような悪寒のような奇妙な心地になりながらも、恐る恐る様子を伺う。さつきみたいなのも怖いけど、あんだけ騒いでおいていきなり黙られるのも結構怖い。

「こ」は逃げたほうがいいんじゃないだろうか。ていうか脱力するなら手は離してよ。ここまでしといて手を離さないとかなにその無駄な執着心。とりあえず「こ」は、刺激しないように手を離して、速やかに逃げるしかない。とにかく逃げるしかない。逃げ切れるかどうかは、まあ、置いておいて。

思い立つたがすぐさま新さんの腕を外せりともう片方の手を伸ばす。

と、思いきや、まるでチーズの罠にかかった鼠の如く、そのもつ片方の手も捕まり、実質両手をふさがれてしまつ。新さんは未だ、頃垂れたままだ。

「な、なにかな新さん。ゲームは、ほら、また今度にしょ？　ね？　とりあえずお互い疲れてるだらつて、ちよつと休んで……」

「ふ」

「ふ？　

「ふふふふふふ」

ひえええええええ。

「解つた。解つたよ。よーく、解つた」

一文に三回も解つたって言つた。怖い。もつ何を言つても怖い。駄目だ、謝りう。謝つて全部嘘だよつて言つてなかつたことにしう。しう。しう。それで隙ができて両手が開放されたらダッシュで逃走経路確保して、「嘘じやねーよバークッ」って言い逃げしう。

そうしよう（懲りない）。

「あ、あのね新さん……」

「解った。もういいよ。大丈夫。大丈夫だから」

何がアアアアアアア。

一から十まで一つも大丈夫そつなどころが見当たらぬんですけど

そして戦々恐々と戦く私に新さんは、この上なく優しい声と穏やかな笑顔を向け、がつちりと私の両腕をホールドしたまま言い放つた。

「じつっつくり、話し合おうか姉さん。いや、楓。どこがどう嫌いなのか、一つ一つ話し合つて、一つ一つ潰していく」

「いや、あの、」

それは話し合いで潰せるつて問題じゃ……

「大丈夫。とことん話し合えば、楓も変わるよ。きっと好きになる。というか好きになるまで話し合おう。大丈夫、時間は腐るほどある」

「ちょっと、待つ」

「大丈夫だよ。きっと大丈夫。絶対大丈夫。大丈夫大丈夫」

ひいいいいいい。

ちょっと、待つて。夢だと言つて。嘘だと言つて。

こんな、ちょ、ア

ツ。

終わぬ

嘘じやなきやTMが困ります。

エイプリルフールでした。

今後も継続して書いていきたいと思いますので（勿論本編の続きを）
を）、こんどり共々TMをよろしくお願いします。

超絶ギャングバレーナファイターアブさん（前書き）

注意事項

- ・この作品は本編（COMPLEX TRIP!）とは全く関係のないパラレルワールド的なお遊び小話です
- ・この作品はエイプリルフールにTMが『ひとりやめて新連載始めるから』と告げた嘘新連載より派生した小話です
- ・アブラアムさんのイメージを著しくぶち壊す危険性があります
- ・アブラアムさんがちょっと現代風な喋り方をしています
- ・世界観が謎です
- ・アブラアムさんが可哀想です
- ・アブラアムさんが可哀想です
- ・彼が一体何をしたつていうんでしょう。ただ普通に生活して、ちよつと主人公っぽい人と絡んで、それなのにこの仕打ち……

超絶ギャングバーリーナファイターアップさん

「この世の悪とは、何を指すのか。元来、人々は善悪の定義に立ち向かったが、未だその確たる答えは導き出されていない。

それでも私は思う。正義とは、己の心が培つもの。悪とは、人々の心に宿るもの。そしてここにまた一人、己の正義を培つ勇者が一人。

そこには古びたビルの一階に居を構える、寂れた事務所。けたたましく耳障りな騒音とも呼べる警報音が、突然鳴り響いた。疎ましくも耳慣れたその騒音に彼の眠りは著しく妨げられ、不快な故に眉間に皺をより濃くさせる。まだ眠い。けれどこの悲鳴のような警報を見逃すことはできない。ソファに横たわる彼はその熊のよつた身体をのそりと起こし 警報を消して一度寝した。

「寝ないでください。襲われたいんですか」

「うわっ」

耳元で囁くと、「ンンマー」秒で起き上がった。

流石だ。常に正義と危険の狭間に身を置くものは、身のこなしも違うらしい。

「いや明らかお前のせいだろ。鳥肌立つだぞ」

「人のモノローグにつっこみを入れてはいけませんアブラアムさん。人権侵害ですよ。なによりルール違反です。次はありませんからね」

「モノローグってお前まるまる声に出して喋つてるし」

「言い訳無用です」

じりりと睨むと、耳をさすっていたアブラアムさんは途端口を開じる。これも日々の調教、いや躰、じゃなくて鍛練のお陰だらう。

着実に正義の味方としての土台が出来上がってきている。素晴らしい成果だ。

満足した私は寝起きのアブラアムさんを一頬り視姦、いや心のREC、じゃなくて朝の健康チェックを済ませ、早速例のコスチュームを彼に手渡した。言わずもがな可愛いバレリーナ衣装（白鳥さん付）だ。

「さつ、事件ですよアブラアムさん。早くこれに着替えてください」

「やだよ」

なぬつ。間髪入れぬ即答とは。やれやれまったく、昨今の正義の味方はまず「」ねるのがセオリーらしい。でも解っている。彼は文句を言いつつも、やることまさかつたりやり通す男なのだとこいつことを。

「いや、やらないからな。そのしたり顔止めてくれ

「……何が気に入らないって言つんですねか」

「何がってなにもかもだよ」

どうやら今日の正義の味方は少々「」機嫌斜めらしい。まるで思春期の中学生みたいなことを言い出す始末。寝ている間に邪氣眼でも患つたのだろうか。

面倒くさそうにガシガシと頭をかいてソファに座りなおすと、胡乱げにあぐびをした。完全にやる気が無いらしい。

「もう勘弁してくれよ本当。お前のお遊びに付き合つてゐるほど暇じやないんだつて、俺」

「お遊び？ 心外ですね。これは正義の味方である貴方の義務なんですよ」

「いや俺は誰の味方でもないよ」

「またまたそんな中立クールキャラ気取つちやつて。キャラ設定はもつ変更不可ですかねー」

「なんだキャラ設定つてー。さつきから色々ルール違反してゐるの 前だらうが絶対」

私はいいんです、私は。そんなことより、警報が鳴つてからもう随分経つていて。早く駆けつけねばまた罪も無い市民が犠牲になつてしまつ。それだけは避けなくてはならない。

私は一度は跳ね除けられたそのコスチュームを、再び彼に押し付けるように差し出した。

「いいから、さあ着替えてアブラアムさん。 いえ、超絶ギャングバレリーナファイターアブさん！ 出番ですよー！」

「なんだよギャングって……その名前もああ……もつ勘弁してくれよ。俺もうついていけないよ」

「いいんですよなんだって！ 昨今はただのおっさんよりチョイ悪親父くらいが丁度いいんです！」

「いや悪いけどそれも絶対古いかり。お前が思つてるほどウケでないからそれ」

説明しよう！ 超絶ギャングバレリーナファイターアブさんとは、

「おこなんでいきなり解説始めてんだ」

世にはこびる悪を一掃するため非公認勸善懲惡機関『アブさんファンクラブ名譽会員』

「なんだ名譽会員つて。名譽毀損会員に改名しろ。そして今すぐ跡形もなく解散しろ」

によつて作り出された、俗に言う正義の味方なのである。彼は日夜悪の秘密結社『イチジヨー』と戦つてゐる。そしていつの日かイチジヨー大元帥アタラを倒し、世に再び至上の平和をもたらすことが、彼に課せられた使命なのだ！

「俺の平和は誰が保証してくれるんだ。ん？」

戦え、アブさん。悪に打ち勝て、アブさん。

「悪はお前だよ」

真の平和はもうすぐそこに！

「聞けよもう本当やだコイツ。親御さんは何してるんだよ娘がこんなになるまで放つておいて大惨事にも程があるだろうコレ」

「何か言いました？」

「言つてません」

文句を言いつつも「こじだ」といつときには従順だ。「これぞ洗脳、いや教育、じやなくて信頼関係のなせる技なのだ。やつぱり私の目に狂いは無かつた。再び私は満足すると、おもむろにアブリフアムさんのシャツに手をかけた。

「……なんだこの手は」

「着替えるんですよ。モタモタしないでください、さあ。今日は特別に私が手伝つてあげますから」

「……やめる」

「早く脱いでください」

「やめろつて」

「早く脱いでつてば」

「よせつて」

「脱げつて」

「やめつ、ちよつ、ア ッツツ！」

こうして日夜、バレリーナファイターアップさんは世のため人のため、悪を正し正義を貫くのだ。けれどそれを知つてゐるのは、『アブさんファンクラブ名譽会員』と、私だけ。

ホラ、貴方の街にももしかしたら。

終（わらせないと可哀想）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7362o/>

COMPLEX VARIETY!

2011年8月6日21時50分発行